九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『兵部卿物語』の成立時期をめぐって・補正 : 宮田和一郎氏の『兵部卿物語』校注

辛島, 正雄
九州大学文学部助手

https://doi.org/10.15017/10473

出版情報：文獻探究. 15, pp.40-41, 1985-02-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『兵部卿物語』の成立時期をめぐって・補正

――宮田和一郎氏の『兵部卿物語』校注――

辛島正雄

本誌13号（昭58・12）において、筆者は、中世擬古物語『兵部卿物語』の成立時期についての私見を述べ、『風葉和歌集』以後鎌倉末期に成ったと見る山岸徳平氏の説に疑問を投じておいたのであった。論述にあたっては、総じて研究の手薄な分野だけに、先学の業績は細大漏さず視野に収めるべく留意していたつもりであったのだが、発表後、研究史上きわめて重要な業績に見落しのあることを、樋口芳麻呂氏より私信（昭和59年7月20日消印）にて御教示いただいたので、ここに前稿の補正の筆を執ることにした。

その業績とは、宮田和一郎氏が「武庫川学院女子大学紀要」第四集（昭和31年度）に発表された「兵部卿物語」である。本稿は、今日までのところ、この物語についての唯一の、しかも卓越した注釈作業であって、中世物語研究者必見のものであること、論を俟たない。そのスタイルは、同氏の名著『校註あまのかるも』（昭23、養徳社）を彷彿させる、簡にして要を得、しかも文脈理解に意の用いてある深切なものである。

かかるすぐれた研究業績を見過していたことは、研究者としてまことに恥ずかしい限りで、宮田氏に対して申しわけなく、深く非礼をお詫び申し上げたいのであるが、その上さらにこのような一文を書いておきたいと思ったことについて、ひとこと釈明を許していただきたい。というのは、筆者も含めて、中世物語研究者の多くに、従来この宮田氏の労作の存在が、ほとんど知られていないらしいことなのである。たとえば、あれほど校合本・参考本を丁寧に掲出していた『物語和歌総覧 本文編』（昭49、風間書房）の『兵部卿物語』の項にあがっていないことはもとより、最近の『研究資料日本古典文学』（昭58、明治書院）や『日本古典文学大辞典 第五巻』（昭59、岩波書店）の当該項目の参考文献欄にも、その名は見出しえないのである。もちろん、だからといって、筆者の責任が軽減されるわけではさらさらないが、このような現状を見る時、何よりもまず、宮田氏の業績を、これを機会に是非周知のものにしておきたいと思った次第なのである。

さて、この宮田氏の研究は、いうまでもなく『兵部卿物語』の全注に眼目があるのであるが、当面の筆者の興味にひきつけて、この物語の成立時期に関する氏の見解にふれておきたい。

氏は、作品中の用語や語法に「近代的色彩が甚だ濃厚である」ことを指摘され、さらに、引歌に「続古今・風雅・新後拾遺などの歌を引いたと思はれるものがみえてゐる」ということから、

彼此を総合して推測するに、この物語は、鎌倉時代の最末期か室町時代の制作で、お伽草子にいたる過渡期のものではなからうか。

と結論づけられた。鎌倉最末か室町の制作というのは、いささか漠然たる感を与えるのであるが、引歌に『風雅集』や『新後拾遺集』の歌があるとされるので、おのずから南北朝以降の成立ということにウェイトを置いていられるものと判断される。これは、山岸氏の「詞違（ことたが）ひ文体共に鎌倉期のものに相違ない」とする見解とは明らかに対立し、むしろ筆者の立場の先蹤ともいうべく、はなはだ意を強くする次第である。

右のように、宮田氏の論拠は、用語・語

法の面と、引歌の面とに二分できるのであるが、前者については、今にわかに発言できる準備もないので、宿題とさせていただくとして、後者について、ひとわたり見ておきたく思う。前稿執筆時に知っていれば、当然言及していたに違いないからである。

氏のいう「続古今・風雅・新後拾遺などの歌を引いたと思はれるもの」とは、次のとおりである。該当箇所の整定本文と頭注を引用する。

(イ)おんかたちは、いとど匂ひ加はり給ふを、なかなかなるいなふちのたきまさりつつおもなしこがるれど、云々　（16ペ）

○いなふちの――「たきまさる」の序。稲淵は大和にあつて枕草子「淵は」の条にも見える。狭衣一上「なかなかなるいなふちのたきまさりつつ心をつくし給ふなめりかし」続古今恋二源具氏「年を経る涙よいかにあふことはなほいなふちのわきまされとや」

(ロ)いまさら思ふともかなふべきことならずと念じかへせど、あまる涙は、ほどなき袖も朽ちぬべきを、云々　（30ペ）

○あまる涙は――新後拾遺恋一藤原頼兼「いかにせむほどなき袖のしがらみに包みなれてもあまる涙を」

(ハ)かうみるめの契りばかりにては、千賀の塩釜、思ひこがれむもびんなきわざなり。　（38ペ）

○千賀の塩釜――宮城県の名所。「思ひこがれむ」の序。風雅恋二安嘉門院四条「身をこがす契りばかりかいたづらに思はぬなかの千賀の塩釜」

(イ)については、『狭衣物語』の詞章の流用(注)であることが明らかであるので、『続古今集』の歌は参考歌程度にとどまる。(ハ)については、前稿に指摘したごとく、『平家物語』巻六「小督」の著名なエピソードでの歌の方を典拠と考えたい。最も問題となるのは、(ロ)であろう。『新後拾遺集』のこの歌は、「あまる涙」「ほどなき袖」という二つの表現が一致する点、樋口氏の言われるとおり、注目に値いする。詠者頼兼（伝未詳）は、この一首よりほかに勅撰入集歌もなく、これが確実な引歌と認められるならば、『兵部卿物語』の成立は、まずは『新後拾遺集』成立（至徳元年〈一三八四〉）以後ということになる。前稿において筆者は、『新千載集』所載の二条為世の歌と類似する作中歌を挙げておいたのであるが、なおこのような本歌・引歌の探索の必要性が痛感される。

以上のように、宮田氏の研究は、前稿執筆にあたって第一に参照さるべき貴重な業績であったのだが、樋口氏の御教示を得るまで、その存在にまったく気づかなかったため、遅まきながら、ここにその補正をこころみた。

最後に、宮田氏の校注作業について一言しておくならば、氏もことわっておられるとおり、底本が活字本の『続々群書類従』であるため、本文に問題のある箇所が散見する。それらは、諸本勘案の上、適切な本文整定を心がけねばならないが、幸い昨年、高橋正治氏によって校本が公刊された（『兵部卿物語 校本・影印篇』〈昭59、東京美術〉）ので、それによって疑問の氷解する部分や、修正を要する箇所も出てくる。が、それにつけても目を見はらされるのは、氏の鋭利的確な校注ぶりである。今後は、氏の校注を十分に読み込んだところから、作品研究を再スタートさせたいと思っている。

（一九八五年二月稿）

（注）ちなみに、「なかなかなるいなふちのたきまさりつつ」の詞章が完全に一致するのは流布本のみであり、『兵部卿物語』作者の見た『狭衣物語』は、流布本系のものであった可能性が強い。なお、片岡利博氏の論考参照。

懇切な御教示を賜った樋口芳麻呂先生に、心より御礼申し上げます。

――九州大学文学部助手――